



症候別“見逃してはならない疾患”の除外ポイント

The 診断エラー学

徳田安春 編

● A5・頁 352 2016 年 3 月

定価：本体 4,400 円＋税

[ISBN978-4-260-02468-6] 医学書院刊

医師が診断に難渋するのには、いろいろな訳がある。診断に占める病歴の価値は、昔と比べてまったく低下していないが、医師は一般に聞き上手ではない。問診・病歴聴取・医療面接への経済的誘導はなく、傾聴や共感に関する教育の歴史が浅かったためでもある。

患者も話し上手ではない。心身共に病んでいる患者の訴えは拙い。何と言っても、医療の素人である。そもそも人間は前向きに生きているのであり、後向きに病歴を振り返るのは苦手である。場合によっては、意識が障害されている。

「診断」とは、特定の病気を解説することではない。症候や検査結果から特定の病気に迫ることだが、その思考回路は、特定の病気を説明・解釈する思考回路とはかなりずれる。経験だけでなく、直観や運にも影響される。だから、最新の医学知識を充満させている大秀才が、意外に鑑別診断がお粗末だったりもする。逆に、座学はそれほどしていないのに、診断推論に冴え渡る者がいる。あやかりたいものだが、近道はない。

書物から迫るとすれば、症候学が満載で、素晴らしい切り口が表題になっている本書の味読に如くはない。

類書はごく少ない。

本書の長所をいくつかにまとめる。

第一には、雑誌特集の集成のため、執筆者がかなり大勢であるのに、各章の記載があまりばらついていない。編者である徳田安春先生の目が行き届いている証拠であろう。

第二に、執筆者のどなたもが、医療現場で汗をかき、臨床的・教育的実践を楽しんでおられることである。

第三に、“見逃してはならない疾患”を五つ程度に絞っていることである。もっともっと挙げたいところを、程よく抑制しているので、かなり読みやすくなっている。

第四に、「各疾患の除外ポイント」が、力作ぞろいである。最も精読すべき項目であろう。

第五として、第四を踏まえた「各疾患の除外ポイント」がまとめられており、役立つ。

ただし、「除外できない」ポイントの一覧も 18 ページに掲げられており、診断の醍醐味は一層深まる。

味読・精読の後には、具体的な臨床例に対する実際の使い勝手が問題になる。これは、若い実践世代に逆に教えていただきたい。